

原 著

大学生における第二大臼歯の萌出状態と口腔内の因子との関係

大森 智栄

概要：本研究の目的は大学生における第二大臼歯の萌出状態に与える因子，および第二大臼歯の萌出状態と近心の第一大臼歯の歯周病・う蝕との関係について調べることである。

対象は2013年度岡山大学入学時健康診査を受けた新入生2,303名のうち，歯科健康診査を希望した2,205名とした。18および19歳でデータ欠損のない1,932名（総受診者の83.9%，男性1,124名，女性808名）を分析対象とした。口腔診査で不正咬合，う蝕経験，口腔清掃度，地域歯周疾患指数，プロービング時出血（BOP）および第二大臼歯萌出状態を調べた。質問票調査で口腔保健行動および矯正治療経験を尋ねた。統計分析にはt検定， χ^2 検定，およびロジスティック回帰分析を行った。

1本以上第二大臼歯が未萌出の者は18人（0.9%），半萌出保有者は240人（12.4%）認められた。ロジスティック回帰分析の結果，男女ともに第二大臼歯萌出異常（未萌出・半萌出）の有無と有意な関連が認められたのは，不正咬合であった（ $p<0.01$ ）。また，男女ともに下顎右側第二大臼歯の半萌出があると，近心の第一大臼歯のBOP（+）の割合が有意に高かった（ $p<0.001$ ）。

結論として，18・19歳の大学生において，男女ともに不正咬合は第二大臼歯の萌出異常と関連していた。また，第二大臼歯の半萌出は近心の第一大臼歯の歯肉出血と関連している可能性が示唆されるが，更なる検討が必要である。

索引用語：第二大臼歯，萌出，大学生，横断研究，不正咬合

口腔衛生会誌 65：17-25, 2015

（受付：平成26年9月19日／受理：平成26年11月8日）

緒 言

永久歯の埋伏は，どの歯種でも起こる可能性がある¹⁾。埋伏する症例が最も多いのは第三大臼歯であり，続いて上顎犬歯と下顎第二大臼歯である²⁾。第三大臼歯の萌出異常は，隣在歯である第二大臼歯の歯周病やう蝕のリスクに影響を及ぼす³⁾。例えば，萌出異常のある第三大臼歯に隣接する第二大臼歯では，う蝕になるオッズ比が2.90-10.00⁴⁾で，平均歯周ポケット深さが0.12-0.32 mm深くなる⁵⁾。その機序として，第三大臼歯の萌出が不十分な場合には，同様の機序により隣在歯との間に清掃困難な空間を形成し，第三大臼歯周囲の細菌量を増加させ，周囲組織に影響を与えることが挙げられる⁶⁾。そこで，第二大臼歯の萌出状態が不十分な場合には，同様の機序により，隣在歯である第一大臼歯に悪影響を与える可能性が考えられる。しかし，その詳細については不明である。

第三大臼歯では，萌出異常に関する要因について多

くの報告がある。それには，臼歯後隙が十分でないこと^{7,8)}，不適切な萌出方向⁹⁾，第二大臼歯より近心のスペースがないこと⁹⁾，不正咬合があること¹⁰⁾などが挙げられる。第三大臼歯の歯胚は石灰化期と根形成期の初期に近心に傾き^{11,12)}，萌出状態に影響する。実際に第三大臼歯の近心傾斜および水平埋伏の割合は約46%といわれている¹³⁾。しかし，萌出状態に与える因子の詳細についても不明である。

一般的に，第二大臼歯は10～12歳で萌出するとされてきた。ところが近年，18～19歳の年齢層においてさえも，第二大臼歯の未萌出や半萌出が報告されている¹⁴⁾。しかし，その理由については，明らかにされていない。また，第二大臼歯の萌出状態が近心の第一大臼歯にどのような影響を与えるかは不明である。

そこで，成人近くになっても第二大臼歯を埋伏させる因子が存在すること，および第二大臼歯の萌出状態は近心の第一大臼歯の歯周病やう蝕に影響を与えうるという仮説を設定した。本研究の目的は大学生において，第二